

日蓮大聖人御書全集

ほけきょうだいもくしやう

法華経題目抄

みやう さんぎ こと

（妙の三義の事）

ほけきようだいもくしよう みよう さんぎ こと

法華経題目抄（妙の三義の事）

ぶんえい ねん がつ にち さい

文永 3 年（'66） 1 月 6 日 45 歳

こんぼんだいしもんじんにちれんせん

根本大師門人日蓮撰す。

なんみようほうれんげきよう

南無妙法蓮華経

と い ほけきよう こころ 知

問うて云わく、法華経の意をもしらず、ただ

なんみようほうれんげきよう

南無妙法蓮華経とばかり、五字七字に限って一日に一遍、

ひとつきないしいちねん じゅうねん いちごしよう あいだ いっぺん とな

一月乃至一年・十年・一期生の間にただ一遍なんと唱えて

きようじゅう あく ひ しあくしゆ 赴

も、軽重の悪に引かれずして四悪趣におもむかず、ついに

ふたい くらい 至

不退の位にいたるべしや。

こた　い
答えて云わく、しかるべきなり。

と　い　ひ　ひ　言　て　取　焼
問うて云わく、「火、火」といえども、手にとらざればや

みず　みず　言　くち　飲　みず　欲
けず、「水、水」といえども、口にのまざれば水のほしさも

止　なんみようほうれんげきよう　だいもく　とな　ぎしゆ
やまず。ただ南無妙法蓮華經と題目ばかりを唱うとも、義趣

覚　あくしゆ　免
をさとらずば、悪趣をまぬかれんこと、いがあるべかる

らん。

こた　い　し　し　すじ　こと　げん　いちどそう　よ
答えて云わく、師子の筋を琴の絃として一度奏すれば余

げん　切　うめのみ　酸　こえ　聞　くち　唾　溜
の絃ことごとくきれ、梅子のすき声をきけば口につたまり

潤　せけん　ふしぎ
うるおう。世間の不思議すら、かくのごとし。いわんや、

ほけきよう ふしぎ しょうじよう したい な 轉

法華經の不思議をや。小乗の四諦の名ばかりをさやずる

おうむ てん しょう きんき たも ひと たいぎよ なん

鸚鵡、なお天に生ず。三帰ばかりを持つ人、大魚の難を

免

まぬかる。いかにいわんや、法華經の題目は八万聖教の

かんじん いっさいしよぶつ がんもく 汝 等 唱 しあくしゆ

肝心、一切諸仏の眼目なり。なんじ、これをとなえて四惡趣

離

うたが

をはなるべからずと疑うか。

しょうじきしやほうべん ほけきよう しん い え

正直捨方便の法華經には「信をもつて入ることを得たり」

い そうりんさいご ねはんぎよう ぼだい いん むりよう

と云い、双林最後の涅槃經には「この菩提の因はまた無量な

しんじん と すなわ おさ つ

りといえども、もし信心を説かば、則ちすでに摂め尽くす」

とううんぬん

等云々。

そ ぶつどう い こんぽん しん もと べいじゅうにい なか

夫れ、仏道に入る根本は信をもつて本とす。五十二位の中

じっしん もと じっしん くらい しんじんはじ

解

には十信を本とす。十信の位には信心初めなり。たといさと

しんじん もの どんこん しょうけん もの

りなけれども信心あらん者は、鈍根も正見の者なり。たと

解 しんじん もの ひぼう せんだい もの

いさととりあれども信心なき者は、誹謗・闡提の者なり。

ぜんしょうびく にひやくごじっかい たも しぜんじよう え じゅうにぶきよう

善星比丘は二百五十戒を持ち、四禅定を得、十二部経を

そら もの だいばだつた ろくまん はちまん ほうぞう 覚 じゅうはつぺん

諳にせし者。提婆達多は六万・八万の宝蔵をおぼえ、十八変

げん う げむしん もの いま あ びだいじよう

を現ぜしかども、これらは有解無信の者。今に阿鼻大城に

き かしよう しやりほつとう む げうしん もの ほとけ じゆ

ありと聞く。迦葉・舍利弗等は無解有信の者なり。仏に授

き こうむ けこうによらい こうみようによらい ほとけと

記を蒙つて、華光如来・光明如来といわれき。仏説いて

のたま うたが しよう しん すなわ まさ あくどう お

云わく「疑いを生じて信ぜずんば、即ち当に悪道に墮つ

とううんぬん

うげむしん もの と たも

べし」等云々。これらは有解無信の者を説き給う。

いま よ せけん かくしや い しんじん

しかるに、今の代に世間の学者の云わく「ただ信心ばか

げ こころ なんみようほうれんげきよう とな

りにて解する心なく、南無妙法蓮華経と唱うるばかりにて、

あくしゆ 免 とううんぬん ひとびと きようもん

いかでか悪趣をまぬかるべき」等云々。この人々は、経文

あ びだいじよう 免

のごとくならば、阿鼻大城まぬかれがたし。

さと なんみようほうれんげきよう とな

されば、させる解りなくとも、南無妙法蓮華経と唱うるな

あくどう 免 たと れんげ ひ したが めぐ

らば、悪道をまぬかるべし。譬えば蓮華は日に随つて回る。

はちす こころ ばしよう いかずち ぞうちよう くさ みみ

蓮に心なし。芭蕉は雷によりて増長す。この草に耳な

われ れんげ ばしょう ほけきよう だいもく にちりん
し。我らは蓮華と芭蕉とのごとく、法華經の題目は日輪と
いかずち さい いきつのみ たい みず

雷 とのごとし。犀の生角を身に帯して水に入りぬれば、水
ごしやく み ちか せんだん いちようひら しじゅうゆじゆん

五尺、身に近づく。梅檀の一葉開きぬれば、四十由旬の
いらん へん われ あくごう いらん みず ほけきよう

伊蘭を變ず。我らが惡業は伊蘭と水とのごとく、法華經の
だいもく さい いきつ せんだん いちよう こんごう けんご

題目は犀の生角と梅檀の一葉とのごとし。金剛は堅固にし
いっさい もの やぶ ひつじ つの かめ こう やぶ

て一切の物に破られず。されども羊の角と亀の甲に破らる。
にくるじゆ おおとり えだ折 蚊 睫 巢

尼俱類樹は大鳥にも枝おれざれども、かのまつげにすくう
鷗 鵲 ちよう えだ われ あくごう こんごう

しようりよう鳥に枝おれぬ。我らが惡業は金剛のごとし、
にくるじゆ ほけきよう だいもく ひつじ つの

尼俱類樹のごとし。法華經の題目は羊の角のごとく、しよ

ちよう

こはく

ちり

取

じしやく

くろがね

吸

うりよう鳥のごとし。琥珀は塵をとり、磁石は鉄をすう。

われ

あくごう

ちり

くろがね

ほけきよう

だいまく

こはく

我らが悪業は塵と鉄のごとく、法華經の題目は琥珀と

じしやく

思

つね

なんみようほうれんげきよう

とな

磁石とのごとし。かくおもいて、常に南無妙法蓮華經と唱え

たも

させ給うべし。

ほけきよう

だいいち

かん

い

むりようむしゅこう

ほう

き

法華經の第一の卷に云わく「無量無数劫にも、この法を聞

かた

だいが

かん

い

ほけきよう

むりよう

くこともまた難し」。第五の卷に云わく「この法華經は無量

くに

なか

ないしみようじ

き

う

とう

の国の中において、乃至名字をも聞くことを得べからず」等

うんぬん

ほけきよう

みな

聞

有

難

云々。法華經の御名をきくことは、おぼろけにもありがたき

しゅせんたぶつ

たほうぶつ

よ

出

たま

ことなり。されば、須仙多仏・多宝仏は、世にいでさせ給い

たりしかども、法華經の御名をだにもとき給わず。釈迦如来

ほけきよう

よ 出

たま

しゃかによらい

は、法華經のために世にいでさせ給いたりしかども、

しじゅうにねん

あいだ

な

秘

語

出

四十二年が間は名をひしてかたりいださざりしかども、

ほとけ

おんとししちじゅうに

もう

とき

みようほうれんげきよう

唱

仏の御年七十二と申せし時、はじめて妙法蓮華經とな

出

たま

まかしな

にほん

えいださせ給いたりき。しかりといえども、摩訶尸那・日本

とう

へんごく

もの

みな

聞

いつせんいちじゅうよねん

等の辺国の者は御名をもきかざりき。一千一十余年すぎて

さんびやくごじゅうよねん

およ

みな

き

三百五十余年に及びてこそ、わずかに御名ばかりをば聞き

たりしか。

きよう

あ

さんぜんねん

されば、この經に値いたてまつることをば、三千年に

いちどはな咲 うどんげ むりようむへんこう いちどあ いちげん かめ

一度花さく優曇華、無量無辺劫に一度値うなる一眼の亀に

譬 だいち うえ はり た だいぼんてんのうぐう けし

もたとえたり。大地の上に針を立てて、大梵天王宮より芥子

投 はり 先 けし 貫

をなぐるに、針のさきに芥子のつらぬかれたるよりも、

ほけきよう だいもく あ 難 しゅみせん はり た

法華經の題目に値うことはかたし。この須弥山に針を立て

しゅみせん おおかげ 強 ふ ひ 糸 渡

て、かの須弥山より大風つよく吹く日いとをわたさんに、

至 針 あな 糸 先 入

いたりてはりの穴にいとさきのいりたらんよりも、

ほけきよう だいもく あ たてまつ 難 きよう

法華經の題目に値い奉ることかたし。されば、この經の

だいもく 唱 たま 思 しょうもう はじ

題目をとなえさせ給わんには、おぼしめすべし、生盲の始

まなこ開 ふぼとう 見 嬉 っよ 敵

めて眼あきて父母等をみんなよりもうれしく、強きかたきに

捕

もの

許

さいし

み

珍

とられたる者の、ゆるされて妻子を見るよりもめずらしと

思

おぼすべし。

と

い

だいもく

とな

しょうもん

問うて云わく、題目ばかりを唱うる証文これありや。

こた

い

みようほけきよう

だいはち

い

ほつけ

みな

じゅじ

答えて云わく、妙法華經の第八に云わく「法華の名を受持

もの ふく

はか

しょうほけきよう

い

きよう

せん者、福は量るべからず」。正法華經に云わく「もしこの經

き

みようごう

せんじ

とく

はか

てんぽん

を聞いて、名号を宣持せば、徳は量るべからず」。添品

ほけきよう

い

ほつけ

みな

じゅじ

もの

ふく

はか

法華經に云わく「法華の名を受持せん者、福は量るべから

とうんぬん

もん

だいもく

とな

ふく

はか

ず」等云々。これらの文は、題目ばかりを唱うる福、計るべ

見

いちぶはちかにじゅうはつぽん

じゅじ

どくじゆ

ずいき

からずとみえぬ。一部八卷二十八品を受持・読誦し、随喜・

護持等するは広なり。

ほうべんぼん

じゆりようほんとう

じゆじ

ないし

ごじ

護持等するは広なり。方便品・寿量品等を受持し、乃至護持

りやく

いちしくげ

ないしだいもく

とな

唱

するは略なり。ただ一四句偈、乃至題目ばかりを唱え、とな

もの

ごじ

よう

こう

りやく

よう

なか

だいもく

よう

うる者を護持するは要なり。広・略・要の中には題目は要の

うち

内なり。

と

い

みようほうれんげきよう

ごじ

幾

くどく

問うて云わく、妙法蓮華經の五字には、いくばくの功德

納

をかおさめたるや。

こた

い

たいかい

しゆる

おさ

だいち

うじよう

ひじよう

答えて云わく、大海は衆流を納めたり。大地は有情・非情

たも

によいほうしゆ

まんざい

ふ

ぼんのう

さんがい

りよう

を持てり。如意宝珠は万財を雨らし、梵王は三界を領す。

みようほうれんげきよう

ごじ

いっさい

くかい

しゆじよう

妙法蓮華經の五字、またかくのごとし。一切の九界の衆生

ぶっかい おさ じっかい おさ じっかい えほう
ならびに仏界を納む。 十界を納むれば、 また十界の依報の

こくど おさ
国土を収む。

みようほうれんげきよう ごじ いっさい ほう おさ
まず、妙法蓮華經の五字に一切の法を納むることをいわ

きよう いちじ しょきよう なか おう いっさい ぐんきよう おさ
ば、經の一字は諸經の中の王なり。 一切の群經を納む。

ほとけ よ い たま ごじゅうよねん あいだ はちまんしょうぎよう と
仏世に出でさせ給いて、五十余年の間、八万聖教を説き

置 たま ほとけ にんじゅひやくさい ときみずのえさるのとし にがつじゅうごにち
おかせ給いき。 仏は人壽百歳の時壬申歳、二月十五日

やはん ごにゆうめつ のち しがつようか しちがつじゅうごにち いた
の夜半に御入滅あり。その後、四月八日より七月十五日に至

いちげくじゅん あいだ いっせんになん あらかん けつじゅうどう 集
るまで一夏九旬の間、一千人の阿羅漢、結集堂にあつま

いっさいきよう 書 置 たま のち しょうほういっせんねん
りて一切經をかきおかせ給いき。その後、正法一千年の

あいだ あいだ ごてんじく ごてんじく いっさいきよう いっさいきよう 広 ひろ たま たま しんたんこく しんたんこく

間は、五天竺に一切経ひろまらせ給いしかども、震旦国に

わた わた ぞうほう ぞうほう い い いちじゅうごねん いちじゅうごねん もう もう ごかん ごかん こうめい こうめい

は渡らず。像法に入つて一十五年と申せしに、後漢の孝明

こうてい こうてい えいへいじゅうねんひのとうとし えいへいじゅうねんひのとうとし ぶつきようはじ ぶつきようはじ わた わた とう とう げんそう げんそう

皇帝・永平十年丁卯歳、仏経始めて渡つて唐の玄宗

こうてい こうてい かいげん かいげん じゅうはちねん じゅうはちねん かのえうまのとし かのえうまのとし いた いた わた わた やくしゃ やくしゃ

皇帝・開元十八年庚午歳に至るまで、渡れる訳者

いっぴやくしちじゅうろくにん いっぴやくしちじゅうろくにん も も きた きた きよう きよう りつ りつ ろん ろん いっせんしちじゅうろくぶ いっせんしちじゅうろくぶ

一百七十六人、持ち来る経・律・論一千七十六部

ごせんしじゅうはちかんしひやくはちじゅうちつ ごせんしじゅうはちかんしひやくはちじゅうちつ みな みな ほけきよう ほけきよう きよう きよう いちじ いちじ

五千四十八卷四百八十帙。これ皆、法華経の経の一字の

けんぞく けんぞく しゆたら しゆたら

眷属の修多羅なり。

みようほうれんげきよう みようほうれんげきよう い い ぜんしじゅうよねん ぜんしじゅうよねん あいだ あいだ きよう きよう なか なか

まず、妙法蓮華経の以前四十余年の間の経の中に、

だいほうこうぶつけこんぎよう だいほうこうぶつけこんぎよう もう もう きよう きよう りゆうぐうじよう りゆうぐうじよう さんぽん さんぽん

大方広仏華嚴経と申す経まします。竜宮城には三本あり。

じようぼん じゆうさんせかいみじんじゅ ほん ちゆうぼん しじゆうくまんはっせんはつぴやくげ

上本は十三世界微塵数の品。中本は四十九万八千八百偈。

げほん じゆうまんげしじゆうはつぽん さんぽん ほか しんたん にほん

下本は十万偈四十八品。この三本の外に震旦・日本にはわ

はちじつかん ろくじつかんとう あごん しようじようきよう ほうどう ほんにや

ずかに八十卷・六十卷等あり。阿含の小乗経、方等・般若

しよだいじようきようとう だいにちきよう ぽんぽん あばらかきや ごじ

の諸大乘経等、大日経は、梵本には阿嚩囉訶佉の五字ば

さんぜんごひやく げ 結 よ しょそん

かりを三千五百の偈をもつてむすべり。いわんや、余の諸尊

しゆじ さんぎよう さんまや かず 知 かんど

の種子・尊形・三摩耶、その数をしらず。しかるに、漢土に

ろっかん しちかん ねはんぎよう そうりんさいご せつ

はただわずかに六卷・七卷なり。涅槃経は双林最後の説、

かんど しじつかん ぽんぽん おお しよきよう

漢土にはただ四十卷、これも梵本これ多し。これらの諸経

みな しゃかによらい と ほけきよう けんぞく しゆたら

は皆、釈迦如来の説くところの法華経の眷属の修多羅なり。

ほか かこ しちぶつ せんぶつ おんのんごう しょぶつ しょせつ げんざいじつぽう
この外、過去の七仏・千仏、遠々劫の諸仏の所説、現在十方
しょぶつ しょきよう みな ほけきよう きよう いちじ けんぞく
の諸仏の説経、皆、法華經の經の一字の眷属なり。

やくおうほん ほとけ しゆくおうけぼさつ たい のたま たと
されば、藥王品に、仏、宿王華菩薩に對して云わく「譬

いっさい せんるこうが しょすい なか うみ だいいち しゆせん なか
えば、一切の川流江河の諸水の中に海はこれ第一、衆山の中

しゆみせん だいいち もろもろ ほし なか がってんし もつと
に須弥山はこれ第一、衆の星の中に月天子は最もこれ

だいいち とううんぬん みようらくだいいし しゃく い
第一なるがごとし」等云々。妙樂大師、釈して云わく「已

こんとう せつ もつと だいいち とううんぬん きよう いちじ なか
今当の説に最もこれ第一なり」等云々。この經の一字の中

じつぽうほうかい いっさいきよう おさ たと によいほうしゆ いっさい
に十方法界の一切經を納めたり。譬えば、如意宝珠の一切

たから おさ こくう ばんしょう ふく きよう いちじ
の財を納め、虚空の万象を含めるがごとし。經の一字は

いちだい　すぐ　ゆえ　みようほうれんげ　しじ　はちまんほうぞう　ちようか
一代に勝る故に、妙法蓮華の四字もまた八万法蔵に超過す
るなり。

みよう　ほけきよう　い　ほうべん　もん　ひら　しんじつ　そう
妙とは、法華經に云わく「方便の門を開いて、眞実の相
しめ　しょうあんだいし　しゃく　い　ひみつ　おうぞう　ひら
を示す」。章安大師、釈して云わく「秘密の奥蔵を發く。

しょう　みよう　みようらくだいし　もん　う　い
これを稱して妙となす」。妙樂大師、この文を受けて云わ
ほつ　かい　とううんぬん　みよう　もう　かい
く「發とは開なり」等云々。妙と申すことは、開というこ
となり。

せけん　たから　つ　くら　かぎ　ひら　難　ひら
世間に、財を積める蔵に鑰なければ、開くことかたし。開
くら　うち　たから　み　けごんきよう　ほとけと　たま
かざれば、蔵の内の財を見ず。華嚴經は、仏説き給いたり

しかども、きよう ひら かぎ 経を開く鑰をば、ほとけ か きよう と たま 仏彼の経に説き給わず。

あごん ほうどう はんはや かんぎようとう しじゅうよねん きようぎよう ほとけと

阿含・方等・般若・觀経等の四十余年の経々も、たまた 仏説き

たま 給いたりしかども、か きようぎよう こころ ひら たま もん 彼の経々の意をば開き給わず。門を

と たま 閉じておかせ給いたりしかば、ひと か きようぎよう 覺 もの 人、彼の経々をさとする者

いちにん 一人もなかりき。覺 たといさとれりとおもいしも、思 びやつけん 僻見にて

ありしなり。ほとけ ほけきよう と たま しよきよう しかるに、くら ひら たま 仏、法華経を説かせ給いて、諸経

くら ひら たま の蔵を開かせ給いき。とき しじゅうよねん くかい しゅじよう はじ この時に四十余年の九界の衆生、始

しよきよう くら うち たから み 知 めて諸経の蔵の内の財をば見したりしなり。

たと だいち うえ にんちく そうもくとう にちがつ ひかり

譬えば、大地の上に人畜・草木等あれども、日月の光な

ければ、眼ある人も人畜・草木の色かたちを知らず、日月

出たまはじ知そうらにぜん

いで給いてこそ、始めてこれをばしることに候え。爾前

しよきようじようや闇ほけきようほんじやくにもんにちがつ

の諸経は長夜のやみのごとし。法華経の本迹二門は日月

ののごとし。諸の菩薩の二目ある、二乗の眇目なる、凡夫

もうもくせんだいしようもうともにぜんきようぎよう

の盲目なる、闍提の生盲なる、共に爾前の経々にては

色形弁ほけきようとき

いろかたちをばわきまえずありしほどに、法華経の時、

しやくもんげつりんはじいたまときぼさつりようげんさき覚

迹門の月輪始めて出で給いし時、菩薩の両眼先にさとり、

にじようびようもくつぎほんぷもうもくつぎひらしようもう

二乗の眇目次にさとり、凡夫の盲目次に開き、生盲の

いっせんだいみらいまなこひらえんむすみよう

一闍提、未来に眼の開くべき縁を結ぶ。これひとえに妙の

いちじ とく

一字の徳なり。

しやくもんじゅうしほん

いちみよう

ほんもんじゅうしほん

いちみよう

あ

にみよう

迹門十四品の一妙、本門十四品の一妙、合わせて二妙。

しやくもん

じゅうみよう

ほんもん

じゅうみよう

あ

にじゅうみよう

しやくもん

迹門の十妙、本門の十妙、合わせて二十妙。迹門の

さんじゅうみよう

ほんもん

さんじゅうみよう

あ

ろくじゅうみよう

しやくもん

しじゅう

三十妙、本門の三十妙、合わせて六十妙。迹門の四十

みよう

ほんもん

しじゅうみよう

かんじん

しじゅうみよう

あ

ひやくにじゅうじゅう

妙、本門の四十妙、觀心の四十妙、合わせて百二十重

みよう

ろくまんきゅうせんさんびやくはちじゅうしじ

いちいち

じ

した

ひと

の妙なり。六万九千三百八十四字、一々の字の下に一つ

みよう

そう

ろくまんきゅうせんさんびやくはちじゅうし

みよう

みよう

の妙あり。総じて六万九千三百八十四の妙あり。妙と

てんじく

さ

い

かんど

みよう

い

は、天竺には薩と云い、漢土には妙と云う。

みよう

ぐ

ぎ

ぐ

えんまん

ぎ

ほけきよう

いちいち

妙とは具の義なり。具とは円満の義なり。法華經の一々の

もんじ いちじ いちじ よ ろくまんくせんさんびやくはちじゅうしじ おさ たと
文字、一字一字に余の六万九千三百八十四字を納めたり。譬
えば、大海の一涸の水に一切の河の水を納め、一つの如意
ほうしゅ けし いっさい かわ みず おさ ひと によい
宝珠の芥子ばかりなるが一切の如意宝珠の財を雨らす
ごとし。

たと あきふゆか そうもく はるなつ ひ あ えだは
譬えば、秋冬枯れたる草木の、春夏の日に値つて、枝葉・
はなみしゅつたい にぜん あきふゆ そうもく

華菓出来するがごとし。爾前の秋冬の草木のごとくなる
くかい しゅじょう ほけきょう みよう いちじ はるなつ にちりん 値

九界の衆生、法華經の妙の一字の春夏の日輪にあいたて
ぼだいしん はな咲 じょうぶつ おうじょう み生 りゅうじゅ
まつりて、菩提心の華さき、成仏・往生の菓なる。竜樹
ぼさつ だいろん い たと だいやくし よ どく くすり

菩薩、大論に云わく「譬えば、大薬師の能く毒をもつて薬と

うんぬん

もん

だいろん

ほけきよう

みよう

とく

しやく

なすがごとし」云々。この文は、大論に法華經の妙の徳を釈

もん

みようらくだいし

しやく

い

じ

がた

よ

じ

する文なり。妙樂大師、釈して云わく「治し難きを能く治

みよう

しょう

とううんぬん

そう

じようぶつ

おうじよう

す。ゆえに妙と称す」等云々。総じて成仏・往生のなり

ものしにん

だいいち

けつじようしょう

にじよう

だいに

がたき者四人あり。第一には決定性の二乗、第二には

いっせんだいにん

だいさん

くうしん

もの

だいいし

ほうぼう

もの

一闡提人、第三には空心の者、第四には謗法の者なり。こ

ほけきよう

ほとけ

たも

ゆえ

ほけきよう

みよう

れらを法華經において仏になさせ給う故に、法華經を妙

い

とは云うなり。

だいはだつた

こくぼんおう

だいいち

たいし

じようぼんおう

甥

あなん

提婆達多は、斛飯王の第一の太子、浄飯王にはおい、阿難

そんじや

兄

きようしゆしやくそん

従兄弟

なんえんぶだい

軽

尊者がこのかみ、教主釈尊にはいとこ、南閻浮提にかるか

ひと

しゅだびく し

しゅつけ

あなんそんじゃ

らざる人なり。

須陀比丘を師として出家し、阿難尊者に

じゅうはつぺん

習

げどう

ろくまんどう

ほとけ

はちまんどう

むね

浮

十八変をならい、外道の六万蔵、仏の八万蔵を胸にうか

ごほう

ぎよう

ほとけ

たつと

気色

べ、五法を行じて、ほとんど仏よりも尊きけしきなり。

りようとう

た

はそうざい

おか

ぞうぜん

かいだん

きづ

両頭を立てて破僧罪を犯さんために、象頭山に戒壇を築き、

ぶつでし

まね

取

あじやせたいし

語

い

われ

仏弟子を招きとり、阿闍世太子をかたらいて云わく「我は

ほとけ

ころ

しんぶつ

たいし

ちち

おう

ころ

しんおう

仏を殺して新仏となるべし。太子は父の王を殺して新王と

たま

あじやせたいし

ちち

おう

ころ

だいば

なり給え」。阿闍世太子、すでに父の王を殺せしかば、提婆

だった

ほとけ

窺

たいせき

ほとけ

おんみ

ち

達多はまた仏をうかがい、大石をもちて仏の御身より血

出

あらかん

けしきびくに

う

殺

ごぎやく

うち

をいだし、阿羅漢たる華色比丘尼を打ちころし、五逆の内

さんぎやく

作

うえ

くぎやりそんじや

でし

たる三逆をつぶさにつくる。その上、瞿伽利尊者を弟子と

あじやせおう

だんな

頼

ごてんじく

じゅうろく

たいこく

ごひやく

し、阿闍世王を檀那とたのみ、五天竺・十六の大国・五百

ちゅうこくとう

いちぎやく

にぎやく

さんぎやくとう

もの

みな

だいば

の中国等の一逆・二逆・三逆等をつくれる者、皆、提婆

いちるい

譬

たいかい

しよが

が一類にあらざることこれなし。たとえば、大海の諸河を

集

たいざん

そうもく

ちえ

もの

あつめ、大山の草木をあつめたるがごとし。智慧の者は

しやりほつ

じんずう

もの

もくれん

従

あくにん

だいば

舍利弗にあつまり、神通の者は目連にしたがい、悪人は提婆

語

にかたらいしなり。

あつ

じゅうろくまんはっせんゆじゆん

した

こんごう

ふうりん

されば、厚さ十六万八千由旬、その下に金剛の風輪ある

だいち

破

しょうじん

むけんだいじよう

お

だいいち

大地すでにわれて、生身に無間大城に堕ちにき。第一の

でし くぎやり しようじん じごく い せんしやばらもんによ

弟子・瞿伽梨も、また生身に地獄に入る。旃遮婆羅門女も

墮 はるりおう ぜんしようびく 墮

おちにき。波瑠璃王もおちぬ。善星比丘もおちぬ。またこ

ひとびと しょうじん お ごてんじく じゅうろく たいこく

れらの人々の生身に堕ちしをば、五天竺・十六の大国・

ごひやく ちゅうこく じゅうせん しょうこく ひとびと みな 見 ろくよく

五百の中国・十千の小国の人々も、皆これをみる。六欲・

しぜん しき むしき ぼんのう たいしやく だいろくてん まおう えんまほうおうとう

四禪・色・無色・梵王・帝釈・第六天の魔王も、閻魔法王等

みな ごらん さんぜんだいせんせかい じつぼうほうかい しゅじよう

も、皆、御覧ありき。三千大千世界・十方法界の衆生も、

みな き

皆、聞きしなり。

だいちみじんごう 過 むけんだいじよう い

されば、大地微塵劫はすぐとも、無間大城を出ずべから

こうしやく 磷 あ びだいじよう く 尽 おも

ず。劫石はひすらぐとも、阿鼻大城の苦はつきじところそ思

あ

ほけきよう

だいばほん

きようしゆしやくそん

むかし

い合いたりしに、法華經の提婆品にして、教主釈尊の昔

し てんのうによらい

き たも

ふ しぎ

覺

にぜん

の師・天王如来と記し給うことこそ不思議におぼゆれ。爾前

きようぎようじつ

ほけきよう

だいもうご

ほけきようじつ

にぜん

の經々実ならば法華經は大妄語、法華經実ならば爾前の

しよきよう だいこおうざい

だいば

さんぎやく

おか

諸經は大虚誑罪なり。提婆が三逆をつぶさに犯してその

ほかむりよう

じゆうざい

つく

てんのうによらい

にぎやく

外無量の重罪を作りし、天王如来となる。いわんや、二逆・

いちぎやくとう

もろもろ

あくにん

とくどううたが

たと

だいち

一逆等の諸の悪人の得道疑いなきこと、譬えば、大地を

返

そうもくとう

けんせき

破

ものなんそう

かえすに草木等のかえるがごとく、堅石をわる者軟草をわ

ゆえ

きよう

みよう

い

るがごとし。故に、この經をば妙と云う。

によにん

ないげてん

謗

さんこうごてい

さんぶんごてん

女人をば内外典にこれをそしり、三皇五帝の三墳五典に

てんごく もの さだ わざわ さんによ お い

諂曲の者と定む。されば、「災いは三女より起こる」と云え

くに ほろ ひと そんなもと によん もと ないてん なか

り。国の亡び人の損ずる源は、女人を本とす。内典の中に

しよじょうどう だいほう けこんぎよう によん じごく つか

は、初成道の大法たる華嚴經には「女人は地獄の使いなり。

よ ほとけ しゆし た げめん ぼさつ に ないしん やしや

能く仏の種子を断つ。外面は菩薩に似て、内心は夜叉のご

い そうりんさいご だいねはんぎよう いっさい こうがかなら

とし」と云い、双林最後の大涅槃經には「一切の江河必ず

えこく あ いっさい によんかなら てんごく あ

回曲有り。一切の女人必ず諂曲有り」と。また云わく「あ

さんぜんかい なんし もろもろ ぼんのう あ あつ いちにん

らゆる三千界の男子の諸の煩惱を合わせ集めて、一人の

によん とうしよう とううんぬん

女人の業障となす」等云々。

だいけこんぎよう もん よ ほとけ しゆし た と そうろう

大華嚴經の文に「能く仏の種子を断つ」と説かれて候

によにん

ほとけ

成

しゆし

焦

たと

だいかんばつ

は、女人は仏になるべき種子をいれり。譬えば、大旱魃の

とき

こくう

なか

だいうん 起

おおあめ

だいち

ふ

枯

時、虚空の中に大雲おこり大雨を大地に下らすに、かれた

むりようむへん

そうもく

はな咲

み 生

るがごとくなる無量無辺の草木、花さき菓なる。しかりと

焦

たね

生

けつく

あめ 繁

朽

いえども、いれる種はおいずして、結句、雨しげければくち

失

ほとけ

だいうん

せつきよう

おおあめ

うするがごとし。仏は大雲のごとく、説教は大雨のごと

枯

そうもく

いつさいしゆじよう

たと

く、かれたるがごとくなる草木を一切衆生に譬えたり。

ぶつきよう

あめ

うるお

ごかい

じゆうぜん

ぜんじようとう

くどく

しゆ

仏教の雨に潤い、五戒・十善・禪定等の功德を修する

はな咲

み 生

あめ

焦

たね

生

は、花さき菓なるがごとし。雨ふれどもいりたる種のおい

朽

失

によにん

ぶつきよう

しろうじ

ず、かえりてくちうするは、女人の仏教にあいて生死を

離

はなれずして、かえりて仏法を失い、悪道に墮つるに譬う

べし。これを「能く仏の種子を断つ」とは申すなり。

ねはんぎようもん

いっさいこうが曲

によにん

涅槃經の文に「一切の江河のまがれるがごとく、女人も

と

みず

軟

もの

またまがれり」と説かれたるは、水はやわらかなる物なれ

いしやま

強もの障

みず

先怯

ば、石山なんどのこわき物にさえられて水のさきひるむゆ

い

によにん

えに、あれへこれへ行くなり。女人もまたかくのごとし。

によにん

こころ

みずたと

こころ弱

みず

女人の心をば水に譬えたり。心よわくして水のごとくな

どうりおも

おとし

こころあ

り。道理と思うことも、男のこわき心に値いぬれば、せ

ほう

みず

かれてよしなき方へおもむく。また、水にえがくにとどま

らざるがごとし。女人は不信を体とするゆえに、只今さあ

み

様

るべしと見ることも、またしばらくあれば、あらぬさまに

ほとけ

もう

しょうじき

もと

ゆえ

曲

によにん

なるなり。仏と申すは正直を本とす。故に、まがれる女人

ほとけ

成

ごしょうさんじゅう

もう

いつ

障

は仏になるべからず。五障三従と申して、五つのさわり、

みつ

従

こと

ごんじきによきよう

さんぜ

しよぶつ

三つしたがう事あり。されば銀色女経には「三世の諸仏の

まなこ

だいち

お

によにん

ほとけ

と

眼は大地に落つとも、女人は仏になるべからず」と説か

だいろん

せいふう

取

によにん

こころ

れ、大論には「清風はとるといえども、女人の心はとりが

い

たし」と云えり。

しよきよう

きら

によにん

もんじゆしりぼさつ

かくのごとく諸経に嫌われたりし女人を、文殊師利菩薩

みよう

いちじ

と たま

ほとけ

成

の妙の一字を説き給いしかば、たちまちに仏になりき。

ふしん

ゆえ

ほうじようせかい

たほうぶつ

だいいち

あまりに不審なりし故に、宝浄世界の多宝仏の第一の

でし ちしやくぼさつ しやかによらい みでし ちえだいいち しやりほつそんじや

弟子・智積菩薩、釈迦如来の御弟子の智慧第一の舍利弗尊者、

しじゆうよねん だいしようじようきよう きようもん

りゆうによ

ほとけ

四十余年の大小乗経の経文をもつて竜女の仏になる

よし なん

つい

かな

ほとけ

まじき由を難ぜしかども、終に叶わず仏になりき。

しよじようどう

よ

ほとけ

しゆし

た

そうりんさいご

いっさい

こう

初成道の「能く仏の種子を断つ」、双林最後の「一切の江

がかなら えこくあ

もん やぶ

こんじきにきよう

だいろん

河必ず回曲有り」の文も破れぬ。銀色女経ならびに大論の

ききよう むな

ちしやく

しやりほつ

した

ま

くち

と

亀鏡も空しくなりぬ。智積・舍利弗は舌を巻いて口を閉じ、

にんてんだいえ かんき

たなごころ

あ

人天大会は歡喜せしあまりに 掌 を合わせたりき。これひ

とえに妙の一字の徳なり。

みよう いちじ とく

なんえんぶだい うち にせんごひやく

かわ

いちいち

みな 曲

この南閻浮提の内に二千五百の河あり。一々に皆まがれ

なんえんぶだい

によん

こころ

曲

り。南閻浮提の女人の心のまがれるがごとし。ただし

しやばや もう かわ

なわ

ひ

延

ただ

娑婆耶と申す河あり。縄を引きはえたるがごとくして、直ち

さいかい

い

ほけきよう

しん

によん

に西海に入る。法華経を信ずる女人、またまたかくのごと

ただ

さいほうじようど

い

みよう

いちじ

とく

く、直ちに西方浄土へ入るべし。これ妙の一字の徳なり。

みよう

そせい

ぎ

そせい

もう

蘇

ぎ

妙とは蘇生の義なり。蘇生と申すは、よみがえる義なり。

たと

こうこく

こし

つる

はは

しあん

鳴

し

譬えば、黄鵠の子死せるに、鶴の母「子安」となけば、死せ

こかえ

よみがえ

ちんちようみず

い

ぎよぼう

悉

し

る子還つて活り、鳩鳥水に入れば、魚蚌ごとく死す。

さい づの 触 ものみな 蘇 に

犀の角これにふるれば、死せる者皆よみがえるがごとく、爾

ぜん きようぎよう ぶつしゆ 焦 し にじよう せんだい によんとう みよう

前の経々にて仏種をいりて死せる二乗・闡提・女人等、妙

いちじ たも 焦 ぶつしゆ かえ しよう

の一字を持ちぬれば、いれる仏種も還つて生ずるがごとし。

てんだい せんだい ところあ さぶつ にじよう ち

天台云わく「闡提は心有り。なお作仏すべし。二乗は智を

めつ ところしよう ほつけよ じ しよう みよう

滅す。心生ずべからず。法華能く治す。また称して妙と

みようらくい だい い みよう な

なす」。妙楽云わく「ただ大とのみ云つて妙と名づけざる

いち うしん じ やす むしん じ がた じ がた

ことは、一には有心は治し易く、無心は治し難し。治し難き

よ じ みよう しよう とううんぬん もん ところ

を能く治す。ゆえに妙と称す」等云々。これらの文の心

だいほうこうぶつけこんぎよう だいじつきよう だいぼんぎよう だいねはんきようとう だいまく

は、大方広仏華嚴経・大集経・大品経・大涅槃経等は題目

に大の字のみありて妙の字なし。ただ生ける者を治して死
せる者をば治せず。法華經は死せる者をも治するが故に妙
と云う釈なり。

されば、諸經にしては、仏になる者も仏になるべから

ず。その故は、法華は仏になりがたき者すらなお仏にな

りぬ。なりやすき者は云うにや及ぶという道理立ちぬれば、

法華經をとかれて後は、諸經におもむく人一人もあるべか

らず。しかるに、正像二千年過ぎて末法に入つて、当世の

衆生の成仏・往生のとげがたきことは、在世の二乗・闡提

とう ひやくせんまんおくばい過

しゅじよう

かんぎようとう

しじゅうよねん

等にも百千万億倍すぎたる衆生の、觀經等の四十余年の

きようぎよう

しょうじ

離

おも

經々によりて生死をはなれんと思うは、はかなし、はか

によにん

ざいせ

しょうぞうまつ

そう

いつさい

しよぶつ

いつさいきよう

なし。女人は在世・正像末、総じて一切の諸仏の一切經の

なか

ほけきよう

ほとけ

成

中に、法華經をはなれて仏になるべからず。

りようぜん

ちようしゅ

どうじようかいご

てんだいちしやだいし

さだ

い

靈山の聴衆、道場開悟たる天台智者大師、定めて云わ

たきよう

おとし

き

おんな

き

こんきよう

みな

く「他經は、ただ男にのみ記して女に記せず。今經は皆

き

とううんぬん

しやかによらい

たほうぶつ

じつぼうしよぶつ

みまえ

記す」等云々。釈迦如来・多宝仏・十方諸仏の御前にして、

まかだいこくおうしやじよう

うしとら

わし

やま

もう

ところ

はちかねん

摩竭提国王舎城の良、鷲の山と申す所にて、八箇年の

あいだと

たま

ほけきよう

ちしやだいし目

当

き

間説き給いし法華經を、智者大師まのあたり聞こしめしけ

われごじゆうよねん いちだいしようぎよう と 置 みな しゅじよう

るに、我五十余年の一代聖教を説きおくことは皆、衆生

りやく なか しじゆうにねん きようぎよう

利益のためなり。ただし、その中に四十二年の経々には

によにん ほとけ 成 と いま

「女人、仏になるべからず」と説きたまいしなり。今、

ほけきよう によにん ほとけ な 説 名 乗 たま

法華經にして「女人、仏に成るとく」となのらせ給いし

ほとけ めつごいつせんごひやくよねん あ わし やま とうほく

を、仏の滅後一千五百余年に当たつて、鷲の山より東北

じゅうまんはっせんり さんかい 隔 まかしな もう くに しんたん

十万八千里の山海をへだてて摩訶尸那と申す国あり、震旦

こく くに ほとけ おんつか い たま てんだい

国これなり。この国に仏の御使いにいでさせ給い、天台

ちしやだいし 名 乗 によにん ほけきよう 離 ほとけ

智者大師となのりて、「女人は法華經をはなれて仏になる

さだ たま

べからず」と定めさせ給いぬ。

しなこく

さんぜんり

隔

とうほう

くに

にほんこく

名

尸那国より三千里をへだてて東方に国あり、日本国とな

てんだいだいし　ごにゆうめつにひやくよねん　もう

くに

づけたり。天台大師、御入滅二百余年と申せしに、この国に

でんぎようだいし

名乗

たま

しゅうく

もう

しよ

つく

生まれて伝教大師となのらせ給いて、秀句と申す書を造り

たま

のうけ

しよけ

りやつこうな

みようほうきようりき

給いしに、「能化・所化ともに歴劫無し。妙法経力もて

そくしんじようぶつ

りゆうによ

じようぶつ

さだ

お

たま

即身成仏す」と、竜女が成仏を定め置き給いたり。しか

とうせい

によにん

そくしんじようぶつ

難

おうじようごくらく

るに、当世の女人は即身成仏こそかたからめ、往生極楽は

ほつけ

たの

うたが

たと

こうが

たいかい

い

法華を憑まば疑いなし。譬えば、江河の大海に入るよりも

容易

あめ

そら

お

速

たやすく、雨の空より落つるよりもはやくあるべきことな

り。

にほんこく いっさい によん なんみようほうれんげきよう とな

しかるに、日本国の一切の女人は、南無妙法蓮華経とは唱

によん おうじよう じようぶつ 遂 そうかん かんぎようとう

えずして、女人の往生・成仏をとげざる双観・観経等に

みだ みようごう いちにち ろくまんべん じゅうまんべん 称

よりて、弥陀の名号を一日に六万返・十万返などとなう

ほとけ みようごう たく 似 によん

るは、仏の名号なれば巧みなるにはにたれども、女人

ふじようぶつ ふおうじよう きよう ゆえ ほか たから かぞ

不成仏・不往生の経によれる故に、いたずらに他の財を数

によん あくちしき 誑

えたる女人なり。これひとえに悪知識にたばらかされたる

にほんこく いっさい によん おん 敵 ころう

なり。されば、日本国の一切の女人の御かたきは、虎狼よ

さんぞく かいぞく ふぼ かたき 遊 女 とう ほけきよう

りも、山賊・海賊よりも、父母の敵・とわり等よりも、法華経

教 ねんぶつとう 教 いっさい によん おん

をばおしえずして念仏等をおしうるこそ、一切の女人の御

敵

かたきなれ。

なんみようほうれんげきよう

いちにち

ろくまん

じゅうまん

せんまんとく

とな

のち

南無妙法蓮華經と一日に六万・十万・千万等も唱えて後

いとま

ときどきみだとう

しよぶつ

みようごう

くち

に、暇あらば時々弥陀等の諸仏の名号をも口ずさみなる

もう

たま

ほけきよう

しん

によん

ように申し給わんこそ法華經を信ずる女人にてはあるべき

とうせい

によん

いちご

あいだみだ

みようごう

称

に、当世の女人は、一期の間弥陀の名号をばしきりにとな

ねんぶつ

ぶつじ

隙

行

ほけきよう

え、念仏の仏事をばひまなくおこない、法華經をばつやつ

とな

くよう

ほけきよう

じきようしや

読

や唱えず、供養せず。あるいはわずかに法華經を持經者によ

ねんぶつしや

ふぼ

きようだい

思

ますれども、念仏者をば父母・兄弟なんどのようにおもい

じきようしや

しよじゆう

けんぞく

軽

思

なし、持經者をば所従・眷属よりもかるくおもえり。かく

ほけきよう しん よし 名乗

して、しかも法華經を信ずる由をなのるなり。そもそも

じようとくぶにん ににん たいし しゅつけ ゆる ほけきよう 弘

淨徳夫人は、二人の太子の出家を許して法華經をひろめさ

りゆうによ われ だいじよう おし ひら く しゅじよう どだつ

せ、竜女は、「我は大乘の教えを聞いて、苦の衆生を度脱

ちか まった たきよう ぎよう きよう

せん」とこそ誓いしが、全く他經ばかりを行じてこの經

ぎよう ちか いま によにん たきよう ぎよう

を行ぜじとは誓わず。今の女人はひとえに他經を行じて

ほけきよう ぎよう かた 知 疾 こころ 翻

法華經を行ずる方をしらず。とくとく心をひるがえすべ

こころ なんみようほうれんげきよう なんみようほうれんげきよう

し、心をひるがえすべし。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

ぶんえいさんねんひのえとらしようがつむいか にちれん かおう

文永三年丙寅正月六日 日蓮 花押